

夢の冒険①

コルサンの岩山

リチャード・アダムズ 著 井辻朱美 訳



THE ROCKS OF
KORSAN

コルサンの岩山

1982年2月10日＊初版発行◎

定価1300円

著者＊リチャード・アダムズ

訳者＊井辻朱美

発行者＊坂本洋子

発行所＊株式会社新書館

東京都文京区千石 1-21-7

電話(03)946-5331 振替・東京 4-53723

印刷＊壮光舎印刷

製本＊大日本製本

〈検印廃止〉落丁・乱丁本はお取替いたします

(分)0-0-97(製)204022(出)3136

RICHARD ADAMS

THE ROCKS OF KORSAN

リチャード・アダムズ
コルサンの岩山
井辻朱美訳



コルサンの岩山*目次

コルサンの岩山

——コウノトリの尾はなぜ短くなったか？

9

スタン・ボロヴァンと竜

——頭も使いようで竜を退治できる

27

名は身をたすける

——英語でカニのことをクラブといいます

52

赤いオウム

——オウムのおしやべりが幸運をもたらす

69

黒い犬

——マン島の黒い犬のこわいうわさを知っていますか？

94

麦畑のネズミ

——小麦畑をあらすネズミの正体

III

海の中のねこ

——ねこが海へ入らなくなったわけ

137

百回

——森の農夫のとんちばなし

151

いくつまで生きられる

——人間のじゅみようと動物のじゅみょう

160

*

作者のことば

——わくわくする驚きと機智にとんだ物語を

171

〔解説〕アダムズ氏と動物たちのこと Ⅱ 荒俣宏

180

カラーイラストレーション*イボンス・ギルバート
本文イラストレーション*ジェニファー・キヤムベル
カバーデザイン*大野拓家デザイン事務所

**THE UNBROKEN WEB
(LE ROCCE DI KORSAN)**

Copyright ©1980 by Richard Adams

© Original Italian edition Rizzoli Editore, 1980

Japanese translation rights arranged with
Rizzoli Editore through Japan UNI Agency, Inc.



王女さまの重いけがをなおすために、海のかなたの「コルサンの岩山」まで、一羽のコウノトリが旅をした。足に結びつけた瓶には、それぞれ死の水と生命の水を入れてこなければならぬが、「コルサンの岩山」とは実は……

コルサンの岩山(9ページ)



予だくさんのすばしっこい農夫スタン・ボロヴァンは運をさがしにでかけていった。世界のはての野でであったのは、宝物をためこんでいる竜の親子だ。なんとか竜との知恵くらべに勝って、金の袋を手に入れたスタン・ボロヴァン。幸いにして竜の親子は血のめぐりが悪く、スタンの目先三寸にころりとだまされてしまうが、うまくさいごまで裏をかきつけることができるだろうか。

スタン・ボロヴァンと竜(27ページ)



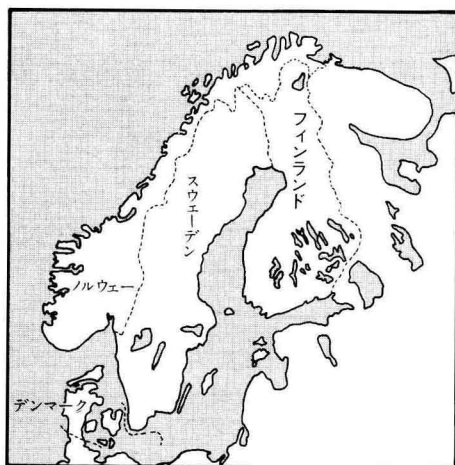


王さまのなくした指輪のありかを見つけださんものと、占星術師に変装してまんまと城にしのびこんだずるがしこい農夫のクラブ。はたして指輪はみつかるだろうか。はたまた化けの皮のはがれることはないのだろうか……

名は身をたすける(52ページ)

コルサンの岩山

——コウノトリの尾はなぜ短くなったか？



エーリク、パパのすわつてるところへおいで。

この夕方ゆうがたさつきまで何してたかいってごらん。牛を家にいれたつて？ ふむ。それから、二ワトリにエサをやつたつて？ ふむ、それは知つてるよ。

それからボルゲンさんに軍手ぐんてを返しに村までいったんだね。そう、それから何をしたの。うん、クヌートとハンスに道みちで会つたんだね。きみたち三人はそれから道みちで何してたのかい。遊あそんでた——どんな遊びあそびだい？ ほかに、だれかいたろう。

覚えてるはずじゃないか。そう、ヤールに会わなかつたかい。ただ、面白半分おもしろはんぶんでああいうことをいつたのかい。ヤールが冗談じやうだんとしてうけとつたのかい。どうしてパパが知つてゐるかは、どうでもいい。きみらはヤールをいじめて、不自由な腕うでのことをからかつたね。そうだろう？

いじわるをするつもりじゃなかつたとは思ふよ。でもとにかくヤールは、きみらがわざといためつけようとしたのと同じに傷きずついたんだ。きみらはヤールに、じぶんのことをみつともないと思ひこませて、だからきみらの友だちにしたくないんだつて思わせたね。三人もよつてた

かつてさ。

さもなかったら、ヤールがきみたち——きみひとりなら、あやまらせたかも知れない、不自由な腕うでだろうとそうでなからうとなんだって言いってね。パパはそのことがはずかしいよ。

いや、泣なくんじゃない。泣ないてもなんにもならない。きみのできるいちばんいいことは、あしたヤールのところへいつて、ごめんねと言いうことなんだ。

でもそれだけじゃない。きみはいろんなことを学まなんでいかになくちゃ。人間にんげんつて、きみやパパより、ましなものだとはかぎらないさ。だって悩なやんでいたり、容姿ようしがみつともなかったりする人がいるからね。でも、そういう人でも、みんなと同じように、神かみさまからさずかった使命しめいがある。そういう人をむごくあつかうような、おろかで残酷ざんこくな人間は、王さまを怒おこらせたらしいの。コウノトリみたいな末路まつろをたどることになるんだ。

さあ、お小言こごはこのくらいにしよう。きみは、ほんとうはいい子どもだね。ちよつと考えが浅あさくてうつかりしてただけだ。きみは、おとなになつたらしい人間になるさ。さ、涙なみだをふいて、窓まどのそばにおすわり。コウノトリのお話はなしをしてあげるよ。そしたらわかるだろうからね。

ずつとむかしのこと、コウノトリたちはみんな、はいいろ鶴つるのような羽毛うもがついていて、それよりもつとすてきな尾おつぽをもっていたんだ。そのときには、コウノトリはデンマークじゆ

うのあらゆる町の屋根のうえに巢をつくっていた。

ヨーベンハヴン、オデンセ、ヒョルリンク、アーフスなんかね——だって当時は人口もすくなくつたし、もつと静かだったから。

でもコウノトリは、いまと同じように毎年北へとんでいつて、コウノトリの王さまの宮廷に顔出しをした。それから季節がかわると、また帰ってくる。コウノトリはいつでも王さまをひとりもつていて、王さまは、フィンランドのエナラ湖のさきで、毎年宮廷をひらくんだ。

これはいいつたえなんで、ほんとうのところは、パパはそっちへいったことがないから知らないけどね。だけど何千というコウノトリがいつもそこにあつまつて、世界じゅうからいろんなニュースをわんさかもつてくるんだ。じぶんのとんでつたところ、どこからでもさ。

コウノトリの王さまつてのはすごい魔法使いだったそうだ。だから、コウノトリは幸運の鳥なんだ。コウノトリに親切にしてやって巢に近づいたりしない人には、幸運がくるっていうだろ。

あるとき、その遠いむかしにね、デンマークの王さまのむすめが森へ遠のりにでかけて、ひどいけがをしたんだ。馬がのりなれたものでなくて、怯えて木々のあいだを突進したので、なげだされたときにはもうひどく枝で、かぎざきや切り傷ができていた。

王女は出血多量、意識不明のまま宮殿にはこぼれ、王国一の医師たちが病床に召された。



けれど手のほどこしやうがなく、一時間もたたないうちに、医師たちは王さまにむかつて、回復のぞみはありませんと申し上げた。

王と王妃は、かなしみにうちひしがれた、というのも王女はただひとりの子どもで、ひじょうに美しく、ちやうど適齡期になつていたからだ。

王さまは国じゆうにおふれをだし、王女の命を救つたものには、ばくだいなほうびをだすことにしたが、人知をこえていると思われるこんな試みに挑戦しようというものは、だれもいなかったんだ。

ところで、王宮の屋根には二羽のコウノトリが巢をかけていた。かれらはもちろん、何が occurred を知つていたし、王さまと王妃さまが王女の寢室で泣いている声も耳にしていた。

夕方になると、二羽のコウノトリは舞いおりて、王さまがあけにくるまで窓をたたきつづけた。

「王さま、もし国じゆうのすべてのコウノトリを祝福し、保護してくださるとお約束いただければ、そして臣下のものたちに未来永劫ずっとコウノトリをだいじにするよう命令をくだしてくださいのなら、わたくしたちはすぐにエナラ湖のかなたにあるコウノトリの王の宮殿に参つて、このことを申し上げます。」

コウノトリの王は知恵があり、強大な力をもっていますし、あらゆる国ぐにからのニュース

があつまつてきます。もし何か王女さまをお直しできる治療法があるなら、きつとわかることでしょう」

王さまは、その申し出にあまり期待もできない気持ちだったけれど、二羽のコウノトリのいったことに同意し、すぐに二羽は、夜に日をついで、北へとび、王の宮廷をめざした。

宮廷には、たくさんのコウノトリがあつまっていた。王と側近たちは、インドやモロッコ、モスクワからシエルトにいたるような、各地からの伝言やニュースをうけとるのにいそがしかった。二羽のコウノトリはつかれて空腹だったけれど、そのなかにわりこんで、式部官に、これはたいへん緊急をようすることだから、すぐ謁見をさせてくれ、とたのんだ。

コウノトリの王はその話をきき、頭をふつてじつと考えこんだまますわっていた。とうとう口をひらくと、「もし王女さまがほんとうにけがで死にかかっているのなら、医者たちのいうようにのみはなないが、この宮廷には、すくなくともコウノトリのとぶところなら世界じゅうのいたるところの、叡智と技がつたわってくる。人や獣や鳥、あらゆるもののだ。

たつたひとつだけ、王女さまの傷を癒す方法がある。だが、それはほんとうにかすかなのぞみなのだ。もしだれかが世界のはてまで旅して、死の水と生命の水をもつてくることができれば——それだけが王女さまを癒すことができるだろう」

「でも王さま」と式部官がいった。「そんな使命をひきうけられる鳥があろうはずがありません。